ビーシュマ・サーハニーの短編小説

マンジュラー・モーハン
Dr. Manjula Mohan
デリー大学オープン・スクール、准教授

（翻訳：高橋明）

1947 年 8 月 15 日はインド人が待ちに待った日となった。その日、太陽が沈むことがないと言われた大英帝国の太陽がインドで沈んだ。独立運動のために多くの人が命を捧げた。獄中で苦しんだ。大勢の人が運動のために仕事を捨て、家族を捨てたことだろう。イギリスの非情で自分勝手な政策のために農民は苦しみ、産業は危機に瀕していた。経済も哀れな状態にあった。世界に冠たるインドの文明と文化を学ぶために世界中から人が来ていたものが、今ではそれは憐みの眼差して見られるようになっていた。インドの言語は彼らにとっては難しく、味わいのないもののように思われていた。イギリス人たちが採った言語政策によって、識字率は上がったけれども、姿格好はインド人だが心は完全にイギリス人であるような人々を多く生み出した。支配をつづけるためには、こういう人間たちが必要だったのだ。こうした非道な外国支配からの自由を祝うことは当然であったが、その自由は苦しみも伴うものだった。分離独立の痛みだった。インドは今や二つに分裂してしまった、インドとパキスタンに。分離独立は宗教を基準にして行われたが、その種は過去と現在の政治の中にあった。マハムード・ガズナヴィー、ナーディルシャー、チンギスカーンのような侵入者が何度もインドで虐殺と略奪を繰り返した。多くのムスリム支配者たちが長くインドを支配した。これらすべての状況の後、ヒンドゥーとイスラム教徒の間に共食や結婚の関係はなかったとしても、人々はお互いにともに暮らすことを運命として受け入れていった。イギリス人支配者たちは、この歴史の消し炭に火を付けた。その結果としてインドの分裂が起こったのだ。一晩のうちに、人々の国が変わった。彼らは家や財産を捨て見知らぬ土地に行かざるを得なくなった。暴力のこの嵐の中で、自分の家族と離れ離れになり、凶器のいけにえとなり、火の中で焼かれた人の数はいかほどだっただろうか。

ビーシュマ・サーハニーはこうした悲劇に満ちた 50 年代に作品を書き始めた。インドで起こっているあらゆる出来事の彼自身が目撃者であった。当時のその

ほかの作家たちと同様に彼の作品の中にもこうした悲劇の足音が聞こえてくる。ビーシュマ・サーハニーの作品の中でも、この分離独立を背景にしたもの、反コミュナリズムを取り上げたものについて多く語られてきている。「アムリットサルに着いた」「目的」「ザフール・バクシュ」「パーリー」「ヴィーロー」と言った作品である。これらの短編小説では人間が理性を失い、人間性や人間的な価値を無意味にしてしまう狂気が描かれている。そうなると人は自分を宗教の請負人とみなすようになる。政治的あるいは個人的な利害が、この狂気をさらに激しいものにする。目の前にいる人間の個性が無意味なものになり、その人が「邪教徒（イスラム教徒にとっての）」や「ムスリム野郎」と言うことになってしまう。「アムリットサルに着いた」では列車の旅が描かれている。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒がまじりあって旅をしているところに、紛争のニュースが届き、状況が一変してしまう。イスラム教徒の多い地域ではイスラム教徒たちが攻撃的になり、ヒンドゥー教徒たちはおびえる。殺し合いにおびえたヒンドゥー教徒たちむりやり列車から降ろされてしまう。誰も反対できない。しかし、ヒンドゥー教徒が多い地域に列車が入ってくると、反対にヒンドゥー教徒が居丈高になり、イスラム教徒たちがおびえる。同じように「目的」の中でもヒンドゥー教徒の暴徒たちがイスラム野郎を生かしたまま逃がしてなるものか、とイマームディーンに襲いかかる。「ザハル・バクシュ」ではヒンディー語が大好きなザハル・バクシュというイスラム教徒とその家族が犠牲になる。「ラームチャリト・マーナス」の言葉は宗教の請負人となってしまったヒンドゥー教徒の足の下に踏みつけられてしまう。ザハル・バクシュは彼らの前に膝まづいて命乞いをする。彼は助かりはするが、気が狂って死んでしまう。

コミュナリズムの狂気を扱ったこれらの短編小説は何か一つの宗教の立場に立つものではない。これらは人間性を滅ぼし、人間を恐ろしい獣に変えてしまう狂気に立ち向かうものである。善人も悪人も両方の側にいる。「目的」の中でイマームディーンに襲いかかろうとするヒンドゥー教徒が暴徒であるとすれば、一方で彼を助けようとする運転手のシェールスィンもヒンドゥー教徒である。「パーリー」では両親と離れ離れになった子供をパキスタンのイスラム教徒の夫婦が育てる。しばらくして社会奉仕団体と両国の警察の努力によって、その子は自分の両親のもとに返される。子供の気持ちについては、イスラムのマウラヴィーもヒンドゥーのパンディットも考えることはない。実際に、これほどの無政府状態と人間らしさの描写をする中で、作家はあくまでどの宗教にも限定されることのない人間性に信頼を置いている。ちょうど、悪魔のような残虐性がそもそもどんな宗教の本質ではないのと同じように。したがって、作家の共感はパーリーの本当の両親だけではなく、養ってくれた両親に向かっている。「サルマー・ア

ーパー」では、物語の語り手が自分にとって初めての町、カラチに行ってサルマー・アーパーの兄の家に着いたとき、自分が受ける歓待と愛情に感激する。読者は最後までその兄弟が本当のサルマー・アーパーの兄かどうかということについてわからないままである。それと同じように、「ヴィーロー」ではシク教徒の家庭に生まれたヴィーローが子供のころに起こった宗教暴動のために家族と離れ離れになってイスラム教徒の家庭でイスラム教徒としてサリーマーという名前で育てられる。家族の中で幸福に育ちながら、インドから巡礼にやってきたシク教徒たちを見て、自分の本当の家族のことを思い出し、会いたいという気持ちを抑えられなくなる。そうした母の様子を見て、彼女の息子は母の兄弟を探そうとする。そして、おそらく再会もできたのだろう。「薄明り」は、1984 年のヒンドゥー教徒とシク教徒たちの間の宗教暴動に基づいている。この短編小説ではシク教徒を次々に殺す場面が描かれている。またその無秩序の背後にある人間の利欲がうごめいている様子も描いている。そうした中で、一つの人間らしい出来事も書かれている。命を危険にさらしながら、人間性の残虐性を批判しつつ、牛乳の車を持ってやってくる一人のシク教徒の運転手が登場する。なぜなら、子供に牛乳が必要だったから。

ビーシュマ・サーハニーのこれらの短編小説を読んでいると、アギェーヤの「避難民」、モーハン・ラーケーシュの「焼け跡の主」そしてクリシュナ・ソーブティーの「硬貨が変わった」などの短編小説を思い出してしまう。そこでは、人間の区別が宗教によってなされてしまうことで、人間は被害者にもなり加害者にもなってしまう。それらの根底にあるのは政治である。

ビーシュマ・サーハニーの有名な短編小説がある「ワーンチュー」。国内外の政治が一人の普通の人間をどのように振り回すものかが、印象深く描かれている。インド人と中国人は友達、といわれた時代に、ワーンチューは仏典の研究のためにサールナートにやってきた。政治や社会の動きとは彼は無関係に暮らした。しかし、その時中印紛争が起こる。中国に戻ると彼は疑いの目で見られる。インドに戻ってきても彼は中国のスパイとみなされる。彼自身は変わっていないのに、政治的な関係が変化することで彼は苦しまなければならない。

独立後の作家たちは中産階級の人たちの心のありかたを題材にした。独立後、重工業が発達し、道、橋、ダム、発電所が作られ、会社員、中産階級の人々が増えたのは自然なことだった。独立後の多くの作家と同様に、モーハン・ラーケーシュ、カムレーシュワル、ラージェンドラ・ヤーダヴ、マンヌー・バンダーリー、アマルカーント、ヤシュパールなどの短編小説には中産階級の人々の問題や心

理が描かれている。ビーシュマ・サーハニーの作品の中にもそうしたことは描かれている。独立後、「金、地位、名誉」が唯一の人生の価値になった。功利主義がはびこるようになり、自己中心主義が広がって行った。その結果、大家族制度は崩れ、年長者に対する敬意も薄れていった。「ボスの宴会」はそうした人間であるシャームナートの物語である。彼にとっては、母親は家具のようなものだったが、ひょんなことから母親の作る刺繍が彼の上役の気に入る。そのとたん、母親は息子にとって役にたつ存在になる。プレームチャンドも、老人の哀れな境遇を「老いたおばさん」の中で書いている。しかし、「老いたおばさん」の中では、おばさんの甥とその嫁は自分たちの仕打ちが間違っていたことに気が付く。そしておばさんも再び大切にされるようになる。しかし、「ボスの宴会」では母親が作る刺繍のおかげで息子が出世するかもしれない、ということで母親の有用性が増すのである。ウシャー・プリヤンワダーの「帰宅」という短編小説の中でも、仕事を退職して帰ってきたガジャーダル・バーブーは家族に冷たくされて、また新しい仕事を探しに行かなければならなくなる

インドでは英語や英文学、イギリス文化の持つ優越性が独立後も少なくなったわけではない。今でも、その魅力がわれわれの心にひどくのしかかっていて、それとは無縁の人々を無学とか田舎者とみなしている。ビーシュマ・サーハニーの「われこそはブラフマなり」の中でそういった人物の心理を描いている。しかし、イギリス人の上司から受けた侮辱が彼に衝撃を与える。その時、「われこそはブラフマなり」というこの呪文が彼を救うことになる。

インドの多くの若者が主に経済的な理由から、外国や大都会に出ていく。そしてそこに住み着く。ビーシュマ・サーハニーの「このろくでなし」は一人のこうした若者ラール・サーハブの短編小説である。彼は仕事を求めてヨーロッパのどこかの国に住む。そこで彼はすべてを手に入れる。いい仕事、名声、優しい妻、かわいい娘たち。しかし、それでも彼は苦しんでいる、なぜなら彼は自分のアイデンティティを失ったと感じているからである。作家は彼の苦しみを描き出している。インドに関係した本を集めることで、インドの地図から、クルター・パージャーマーを着て町を歩いてみたいと思うことなど。自分の国を見てみたいという気持ちから彼はインドに帰る。しかしそこでも居場所がないという感覚が彼から離れない。彼は考える、「この年になっても一つの願望が心から消えることがない、道を歩いていて誰かがいきなり声をかけてくれる、『このろくでなし』と。私は大喜びで走り寄り、その男に抱きつく、という願いが」この短編小説はインドを離れて外国に移り住んでいる多くのインド人の心を描き出している。

ビーシュマ・サーハニーは、虐げられ、搾取されている人たちのための進歩主義作家連盟とその演劇団体「イプター」と関係している。ビーシュマ・サーハニー氏の人間的な優しさを知っている人は、彼のこの党派性を理解している。彼の多くの短編小説は搾取されている人たちに対する持てる人々の非人間性と残酷な態度を描くものである。たとえば、「ピクニック」はガウリーと言う名前の働く女性の物語である。彼女は他人の家で皿洗いをして暮らしている。働き先の家からもらう残り物をたべて、汚れた水を飲んでいる。しかし金持ちの家の人間たちはそのことをまるでピクニックに行くようなものだと思っている。「サーグミート」では、ジャッガーという名の召使が一生懸命主人の仕事をしている。主人には好かれており、時には 10 ルピーか 20 ルピー余分にもらったりもする。ほめられることもある。まるで人間ではなくジャイキーという名の犬のようである。ジャイキーを主人たちは抱いたり、犬は主人たちの足元の周りを走り回ったりする。しかし、ジャイキーが車にひかれて死んでしまうが、ジャッガー自身も主人の弟の仕打ちに苦しんで、あげくに自殺してしまう。貧困ライン以下の暮らしをしている労働者の苦しさを描いたこうれらの短編小説はヤシュパールの「人間の子供」を思い出させる。この話は物語の語り手によって、夫のやさしさと理解についてしきりに肯定的に語られる。それは語り手の相せざるを得ないインドの社会の中での女性が置かれている二次的な地位を表している。「苦しみ」という短編小説では、デリーのような大都会で持てる者たちが、持たざる者たちに対する非人間的な仕打ちを描いている。そこでは自動車を運転する者が自転車に乗る者に事故の責任を押し付ける。運転手たちは事故の被害者がどれほどの人間かしきりに測ろうとする、「こいつはいくら給料をもらっているのか」と。一方、自転車に乗っていた男は自動車の男の気前の良さに感謝している。病院には入れてくれるし、命は助かるし、「だんなの自動車にひかれてほんとうに運がよかったです」と。

どんな秩序であれ、それをきちんと運営するには法を担う組織があり、それを実施するための官吏がおり、職員の協力もある。時々議論や実施体が必要にもなる。「杭」という短編小説えは、あるセミナーるの描写がある。そのセミナールの本当の目的は、セミナールを口実にして旅行をしたり、金を貯めることである。「われわれはみんな自分の杭を引っこ抜いてこのセミナールに参加しに来た。セミナールがデリーから離れた場所に決まったのも、金も残るだろうし、旅行もできるだろうと思ったからだ。」この短編小説は自分より下の立場の人間たちを押さえつけておこうとする、役所で働く役人たちの性格を描いている。その中では、ジャイン、ヴィナーヤク、局長たちがそのようにふるまう。結果として、彼らは互いに打ち解けることができない。しかし、ヴィナーヤクのような人間にとって

は、自分の仕事を守るためにジャインのひどい態度にも我慢せざるをえない。

ビーシュマ・サーハニーの短編小説の特徴の一つは、その平易さにある。普通の会話につかうような言葉遣い、シンボリックなかつ例えの使い方、状況の微妙かつ詳細な描写によって、とても分かりやすいものになっている。宗教的な非寛容さについて彼は「薄暮」という表現を多用する。薄暮とは昼と夜の境界であり、不鮮明さの象徴である。作家は、非理性的、不決断、そして不安定な状況を描くのにこの単語を使用する。これらの短編小説は夕方の薄明りから始まり、朝の光とともに終わる。「杭」の中で、ジャインとヴィナーヤクの間の緊張関係が原因で、丁々発止が続く。この緊張がゆるむようにと期待はするのだが、それはかなわない。「まるで何か夢が破れているようだ。まわりの薄明かりの中で戯れている鳥たちが羽をたたんでどこへ行ってしまったのか。空気の中に失望のチリが舞っていた」ビーシュマ・サーハニーのすべての短編小説の中にこのような象徴的な描写がされている。それは状況や心理状態そして作家の目的を明らかにしている。独立以降の短編小説、特に「新短編小説運動」時代の作品は、象徴と比喩の手法を多用する。たとえば、アマルカーントの「人生とヒル」ではヒルとは苦しい暮らしの中でも生きていこうとする人間の象徴である。ラージェンドラ・ヤーダヴの「ラクシュミーが囚われているところ」ではラクシュミーはインド社会の女性の置かれた状況を伝える。カムレーシュワルの「ジョージ５世の鼻」ではジョージ五世の銅像の欠けた鼻の修理ということで、実際には汚職の実態を表現している。ビーシュマ・サーハニーのいくつかの短編小説では一定の言葉や文を繰り返すという手法が用いられている。たとえば、「サーグミート」の中では、「男と言うものは頭がいいものだ」そして「わたしはとてもやってられない」という文が何度もでてくる。最初の文では男の優位性が表現され、後の文では語り手の女性の無力さとあきらめが描かれている。ビーシュマ・サーハニーの短編小説では、彼の繊細な洞察力が表れている。すべての場面や状況の細かい描写に作家は努めているし、その描写は彼の作品の最も優れた点でもある。

ビーシュマ・サーハニーの短編小説は非常に数が多い。今、それらすべてについて話をすることはできない。しかし、ここで取り上げたいくつかの短編小説によって彼の作品が独立後のインドの状況や主な出来事そしてその影響と人間の心理とを描いていることが分かる。彼の共感は普通の人たち、特に搾取されている人たちとともにある。彼の短編小説によって独立後の短編小説の傾向を理解することができるのである。